

氏 名	やま ね しゅう 山 根 周
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	論 工 博 第 3863 号
学位授与の日付	平 成 17 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	インドの歴史的市街地における街区空間の構成に関する研究 ——ラーホール、アフマダーバード、デリーを事例として——

論文調査委員 (主 査) 教 授 高 田 光 雄 教 授 樋 口 忠 彦 助教授 布 野 修 司

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、インド亜大陸の歴史的市街地における街区空間に関して、その空間構成、コミュニティの構成、歴史的形成過程および変容過程を明らかにし、街区空間の構成原理について考察したものであって、5章から構成されている。

第1章は序論であり、研究目的、研究の位置づけと視点、論文構成を述べている。本論文が、北西インドの歴史的イスラム王都として位置づけられるラーホール、アフマダーバード、デリーの三都市を研究対象とすることを述べ、先行するイスラム都市論、ヒンドゥー都市論をふまえながら、アーバン・ティシュ（都市組成）における街区空間に着目することによって、従来の成果を批判的に検討、再構成するものであるという研究の位置づけを示している。

第2章では、ラーホール旧市街における街区空間の構成について考察している。街区空間の形態的特性に焦点を当て、モハッラ、クーチャ、ガリ、カトラと呼ばれる街区の構成を、①街路体系と街区構成の関係、②街区の境界、③街区タイプによる街路形態の比較、④街区規模、⑤街区内の施設分布といった視点から明らかにした。また、街区内の伝統的都市住居に関する調査に基づき、その空間的要素、装飾的要素を明らかにするとともに、住居形式の分析と分類をおこなっている。さらに、街区别の住居規模の比較や、住居入口と街路システムの関係についての分析、街区構成と微地形との対応に関する考察などを通して、街区空間における住居の集合形態を明らかにした。加えて、街区名称の分析から、街区構成においてイスラム圏由来の構成原理とインドに伝統的な構成原理との重層性があることを明らかにした。

第3章では、アフマダーバード旧市街の街区構成および都市住居の空間構成に関して考察している。旧市街における住民の宗教別住み分けの構成に着目し、ジャイナ教徒が主要な住民であるマネク・チョウク地区、ヒンドゥー教徒が支配的なカディア地区、ムスリムがカマサ地区という三つの地区を調査対象地区としている。支配的な住民の宗教やコミュニティの違いにより、ボルと呼ばれる街区構成や街区内の集住形態にどのような違いがあるかを、街区形態、街路の階層性、施設分布などの点から分析し、ジャイナ教徒居住街区において、空間の階層性と重層性が最も強く見られることを明らかにした。

また、調査地区の中で最も歴史が古いマネク・チョウク地区をとりあげ、街区内の住居構成を詳細に分析するとともに、地区内の伝統的都市住居の調査に基づき、住居の空間構成と住居類型および集合形態を明らかにしている。さらに伝統的な農村住居に特徴的な空間要素に着目し、オトゥロ、カドゥキと呼ばれる農村集落における共用空間を私有化することで、独立した都市住居の形式が成立したと論じている。

第4章では、デリーの旧市街であるオールドデリーを対象とし、街区空間の歴史的形成過程と変容プロセスに着目した分析、考察をおこなっている。文献からムガル朝時代の街区構成と街区形成のパターンを示し、19世紀半ばに描かれたデリーの詳細な地図を分析することにより、当時の市街地および街区空間の構成を明らかにした。また、ジャーマ・マスジッド周辺地区の街区調査に基づき、街路構成、住居規模、施設分布、商店業種の分布などの点から現在の街区構成を明らかにしている。それらの比較により、19世紀半ばには、街路体系や空間形態において、すでに現在とほぼ変わらない街区空間が形成されていたことを示した。また、宗教施設の分布の比較から、ムスリムとヒンドゥーの住み分けの構成に大きな変化があったことを明らかにし、1947年の印パ分離独立による住民の大規模な移動がその要因であると論じている。

第5章は結論であり、本論文で得られた成果について要約している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、インド亜大陸の都市における歴史的市街地について、都市の集住単位である街区の空間構成およびその構成原理を解明することを目的に、北西インドの歴史的イスラーム王都であるラーホール、アフマダーバード、デリーをとりあげて、街区空間の形態的特質、街区構成とコミュニティ構成の対応関係、街区空間の歴史的変容プロセスを、モハッラ、ボルなどと呼ばれる街区およびそれらを構成する伝統的住居の空間構成に関する詳細な現地調査に基づく解析、古地図との比較分析などによって明らかにしたものであり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. 三都市の街区空間はいずれも路地を基本的単位として構成され、ラーホール、デリーにはモハッラ、クーチャ、ガリ、カトラという街区単位が、アフマダーバードにはボル、カンチョー、カドゥキ、ガリ、ワドなどの街区単位が存在する。これらの街区境界や規模、内部の街路構成、施設分布などを詳細に明らかにし、[モハッラ] > [クーチャ、ガリ]、[ボル] > [カンチョー] > [カドゥキ] という階層性や、ボルの中にさらにボルが含まれるという重層的空間構造があることを解明した。
2. 都市施設分布および街区名称の分析から、イスラーム圏に由来する要素と、インド固有の伝統的な要素とが重層的に街区空間に織り込まれていることを明らかにした。
3. 宗教、カースト、職業などを同じくするコミュニティによる住み分けの実態を明らかにし、アフマダーバードにおいては宗教コミュニティの違いにより、街区空間の階層性に差異があることを示した。
4. 街区を構成する伝統的都市住居の構成要素を明らかにし、住居形式がラーホールでは三つ、アフマダーバードでは五つの類型に分けられることを示した。また、住居類型の分布と街路構成との対応関係の分析から住居の集合形態を明らかにし、さらにアフマダーバードの都市住居について農村住居からの発展過程を解明した。
5. 古地図の分析から、19世紀半ばのデリー市街地の構成を解明し、街路体系や、街路門、宗教施設の分布を現在と比較分析することにより、街区空間およびコミュニティの分布構成の変容過程を明らかにした。

以上、本論文は、インドおよびイスラーム圏の都市構成原理を明らかにする上で大きな示唆を与え、インドの歴史都市における都市計画および都市形成史に関して新たな知見を提供するものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年3月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。